

《論 説》

テミスティオスにおける「哲学」と「哲学者」

西 村 昌 洋

論文内容の要旨

アリストテレス注解者にしてコンスタンティノーブル元老院議員、そして政治家であるテミスティオス（317年～388年頃）は、355年の元老院編入以来、三十年以上にわたって皇帝や人々の前で弁舌を振るい続けてきた。彼は自分を「哲学者」とであると称し、本人の考える「哲学」を実践してきた。テミスティオスの唱える「哲学」は次のように要約できる。哲学には神々に関わるものと人間に関わるものとの二種類がある。その内、後者の哲学、つまり人やボリスの幸福を問題とする方こそ本来の哲学であり、この実践的で政治的な哲学をこそ選ぶべきである。そして、哲学者は人々の幸福のために聴衆の前に進み出て公的に語らなければならない。

テミスティオスのいう「哲学」は、新プラトン主義の、特にイアンブリコス学派の哲学者とは、信条の面でも実践の面でも相容れることがなかった。テミスティオスは新プラトン派の非社会的で閉鎖的なあり方を、人前に進み出て語ろうとしない態度を批判する。ユリアヌスの時代には、テミスティオスが後景に退く一方で、新プラトン派の哲学者が宮廷に現れたのだが、ユリアヌスという後ろ盾を失うと彼らはすぐに追いやられてしまった。政治家として長命を保ったテミスティオスも、その「実践」性にもかかわらず、本人の死後後続が出現せず、哲学者の周縁化を押し止めることはできなかった。

1. はじめに

テミスティオスは四世紀の東地中海世界において一種特異な位置を占める。彼は、異教徒の「哲学者」として、コンスタンティノーブルの元老院議員として、コンスタンティウス二世からテオドシウスまでの一連の皇帝に仕え続けた。数回に及ぶ政権交代にもかかわらず、その地位と立場が揺らぐことのなかった稀有な人物である。

テミスティオスが政治的に長命を保った理由としては以下の二点が挙げられている。一つは、テミスティオスがコンスタンティノーブルの大立者であるという点だ。彼は、同市の元老院議員数をかろうじて三百人というところに代えて二千人にまで満たした¹⁾。新議員の選出というこの人事を通じて形成された東方エリート層とのパトロネジ網がテミスティオスの拠って立つ基盤であり、コンスタンティノーブルの元老院を統御したことが政治的長命の鍵だというものである²⁾。もう一つは、テミスティオスが「哲学者」であること

に関わる。彼は、自分が「哲学者」であるということにこだわり、この点では譲らなかった。古代世界において哲学者は、世俗的な権力や人間関係には縛られない存在と目されていた。しかし、世俗世界にとらわれないが故に、超越した存在として危急の折には権力者と交渉しようと、皇帝や総督に対しても率直に意見できると周囲から期待された。つまり、世俗的でないと思われているためにかえって世俗での役割を求められた³⁾。テミスティオスが「哲学者」を名乗ることは、このような哲学者のイメージを身に纏うということである。そして、異教的な学問伝統に属する人物を抱え込むことは皇帝にとっても意味のあることだった。皇帝と宮廷がキリスト教化していく一方で、四世紀の時点では統治を支えるローカル・エリート層にはいまだ異教への信奉者が多かった。前者が効率的に帝国を運営していく上では、何らかの方法で後者を抱き込む必要がある。そこで両者の間を仲介する存在として、異教徒の哲学者でありながらキリスト教徒の皇帝に仕えるテミスティオスが重宝されたのだという⁴⁾。「哲学者」の衣装を纏うテミスティオスは、当時の皇帝たちにとって都合のよい人物だったのだろうか。

では、このテミスティオスにとって、「哲学」とはどのようなものか。本稿で取り扱うのは「哲学者」テミスティオスの「哲学」観である。

2. テミスティオス：アリストテレス注解者

テミスティオスは317年頃⁵⁾、おそらくパフラゴニアで生まれた⁶⁾。名の伝わらぬ彼の祖父は、ディオクレティアヌス時代の有名な哲学者だったという⁷⁾。父エウゲニオスもまた哲学者である。また、レトリックはポントスで学んだという⁸⁾。テミスティオスの若い頃の経歴はあまりわかっていない。おそらく330年代後半にはコンスタンティノープルに留まり、哲学の教師をしていたと思われる⁹⁾。340年代初めには、ニコメディアで教師として定着しようとしていたこともあったようだ¹⁰⁾。そして、340年代終わり頃には、コンスタンティノープルで哲学者として教鞭を執った¹¹⁾。アンティオケイア出身の修辞学者リバニオスと面識を得たのもこの頃であり、この後二人は文通相手となる¹²⁾。テミスティオスによる哲学関係の著作のほとんどは、おそらくこの頃から355年のコンスタンティノープル元老院編入までの間に書かれたものとされる¹³⁾。

テミスティオスによるアリストテレスの著作への注解書、パラフラーシスは以下のものが残されている¹⁴⁾。

- 1) 『分析論後篇』注解：ギリシア語で残る
- 2) 『自然学』注解：ギリシア語で残る
- 3) 『天について』注解：ヘブライ語訳で残る
- 4) 『形而上学A (=12巻)』注解：ヘブライ語訳、およびアラビア語訳の断片で残る
- 5) 『魂について』注解：ギリシア語、アラビア語訳、中世ラテン語訳で残る

これ以外のアリストテレスの著作に対する注解、およびプラトンの作品への注解も存在したという証言はあるが、それらは残されていない。テミスティオスのアリストテレス注解書の中で最も重要なものは、『魂について』へのそれである。テミスティオスによる『魂について』への注解書は、同書への注解書の中でもテキストが残されているものとしては最古のものである。テミスティオスによるこの注解書は、西方では13世紀にメルベケのギョームによってトマス・アクィナスのためにラテン語に翻訳された。東方世界でも、彼のパラフラーシスにはヘブライ語やアラビア語の翻訳があることから、アリストテレスの注解者として一定の地位を得ていたことが分かる。『スーダ』にも、テミスティオスはアリストテレスのパラフラーシスを著した哲学者として記されており、ビザンツ帝国でも同じ様に認識されていたのだろう¹⁵⁾。フォティオスは、テミスティオスを「哲学の愛好者にして探求者」と評する¹⁶⁾。しかし、このような評価とは逆に、近代に入るとテミスティオスは哲学者としての資質を否定されることになった。

3. テミスティオス：弁論家、政治家

テミスティオスに対する否定的な評価として、以下に二例のみ挙げておく¹⁷⁾。

ヨハanneス・ライスケ：「[テミスティオスは] 宮廷の狡猾な追従屋、実体よりも見てくれで磨いた自身の哲学を空虚にひけらかし、無思慮にもホメロスや故事をかき乱して混ぜ合わせる、トートロジストにしてソフィスト。あらゆる演説においてほぼ同様であり、いたるところで詭弁を追求する。」¹⁸⁾

ヨハanneス・ゲッフケン：「多くの支配者たちは、この名の知られた弁論家[テミスティオス]を自らの帝国の栄光の道具にした。彼はアリストテレスの注解に長けていたので、自らを哲学者と見なした、そして、ソフィストとしての自分の活動への非難に対し自分を弁護せねばならないと考えた。自分では哲学だと考えているものを宮廷の香りで飽かせ、自分の称える皇帝ほとんど全ての内に哲学者あるいは少なくとも哲学者の友人としての姿を見出せると考え、ヨウリアヌスやウァレンスを次々にプラトンの言う理想的な統治者として賛美し、尽きることの無い野心の炎でのみ満たされたこのパネジリストは、共感できる人物ではほとんどない。」¹⁹⁾

このような極端な評価はどこから由来するのか。それは、テミスティオスが弁論家、政治家としての顔を持つことに関係している。

哲学者テミスティオスにとっての転機は、おそらく350年に訪れた。この年、テミスティオスは小アジアのアンキュラで、皇帝コンスタンティウス二世に称賛演説を捧げたのだ²⁰⁾。その見返りは、355年コンスタンティウスがコンスタンティノープル元老院へ宛てた書簡において、テミスティオスを同元老院へ議員として編入(adlectio)することだった²¹⁾。こうして、彼は政治家に転身したのである。テミスティオスは異教徒ないし非キリスト教徒の

哲学者として、キリスト教徒の皇帝たち、コンスタンティウス、ヨウリアヌス、ヴァレンス、テオドシウスに仕えてきた。数回に及ぶ政権交代にもかかわらず、三十年以上その地位がほとんど揺らがなかった稀有な人物である。そして、これらの皇帝たちにテミスティオスは称賛演説を発表し続けてきた。そのジャンルの性格上、権力者への「リップサービス」やプロパガンダ的な発言が多いという点は否めないが、称賛演説の発表は四世紀当時においてはごく一般的な慣習であり²²⁾、それ自体はさほど特異なことではない。

残されたテミスティオスの弁論33篇の内、18篇が皇帝に捧げた称賛演説に当たる。これら18篇は便宜的に「政治弁論 (λόγοι πολιτικοί)」と、残りの15篇は「個人弁論 (λόγοι ἰδιωτικοί)」と呼ばれる²³⁾。前者は四世紀後半にローマ帝国東半で展開された政策について、後者は当時の東方ギリシア語圏における文化的な風潮やテミスティオスの人生と信条について光を当ててくれる。

テミスティオスの政治的なキャリアは、二度の官職就任でもってピークを迎える。最初のそれは、コンスタンティウス治下、359年までコンスタンティノーブルのプロコンスルに就任した時²⁴⁾、そして二度目はテオドシウスによって384年に同市の都市長官 (Praefectus Urbis Constantinopolitanae) に選ばれた時である。それ以外でも、彼はコンスタンティノーブル元老院議員の代表格の一人であり、元老院に編入されてから都市長官に就くまでの約三十年間に同元老院を代表しての使節役を任されること十回²⁵⁾、また同元老院に新議員のリクルートを行い、議員数を三百人から二千人にまで増やしたという²⁶⁾。テミスティオスは二人の皇帝から青銅製の像を建てることを許され²⁷⁾、コンスタンティウスとは共に食事の席に着く機会もあった²⁸⁾。むしろ同じ異教徒である皇帝ユリアヌスの時代に、テミスティオスは冷遇されていたようであるが²⁹⁾、ユリアヌスの短い治世を除くと、彼は一連のキリスト教徒の皇帝たちから常に重用されてきたといつてよい。

政治的には一定の地位を占めていたテミスティオスであるが、既に存命中、彼の同時代人たちから批判を受けてもいた。すなわち、人々を集め大勢の聴衆の前で公然と弁舌を振るう、まさにソフィストである、と³⁰⁾。テミスティオスへの批判は、特にコンスタンティノーブルのプロコンスルおよび都市長官に就任した頃にとりわけ激しかったようである。都市長官職に関しては、わずか数ヶ月の任期のみで辞職せざるをえなかったとも推測されている³¹⁾。また、テミスティオスが、コンスタンティノーブルという、東方の諸ポリスを食いにしながら成長した、キリスト教とローマ支配とを体現する都市の大立者であったことも、彼の風評に影響したかもしれない³²⁾。テミスティオスの哲学者としての資質の有無は、既に同時代においても問題となっていた可能性がある³³⁾。

しかし、テミスティオス本人は、あくまでも自分を「哲学者」として提示し続けた。政治家・弁論家として見た場合でも、多くの皇帝と関わりながらも失脚せずに長命を保ったという点で特異な存在であるが、哲学者としても、テミスティオスは当時の主流とは遊離した例外的な人物と考えられている。本稿の考察対象は、「哲学者」として政治権力と関

与したテミスティオスの提示する「哲学」観・「哲学者」観である。しかし、「例外」と目される人物を扱う以上、「例外」ではない「主流」の存在、すなわち「新プラトン主義」の哲学者についても言及する必要がある³⁴⁾。以下、新プラトン主義者と政治活動との関連について簡略にまとめる。

4. 新プラトン主義者と政治活動

一般的な見解では、新プラトン主義の哲学者は現世的な事柄や政治的な問題には関心が薄いとされてきた。彼らが掲げる目標は、人が「可能な限り神に似ること (ὁμοίωσις θεῷ κατὰ τὸ δυνατόν)」³⁵⁾、人の神への近接であり、その関心は時間と空間を超越した非物質的世界へ向き、この世での実践的な生や政治的な問題には無関心である、と³⁶⁾。しかし、新プラトン主義の哲学者たちも実際にはそれほど現世から遊離してはおらず、またしばしばローマ帝国中央政界と何らかのコネクションを有していることがあるという点も、これまでに指摘されてきた³⁷⁾。ここでは、テミスティオスが生きた四世紀までの新プラトン主義者と政治活動との関係について、ごく簡略にはあるがまとめ、当時の文化的な状況を、部分的にはあるが、本稿の主題との関連上概観しておく。

①ローマにおけるプロティノス・サークル

205年頃エジプトで生まれ、230年代にアレクサンドレイアでアンモニオス・サッカスのもと哲学を学んだプロティノスは、243年、ペルシアやインドの哲学を知ろうとゴルディアヌス三世のペルシア遠征に参加した³⁸⁾。244年に同帝が殺され遠征が失敗に終わると、プロティノスはシリアのアンティオケイアへ逃れた。その後イタリアのローマを訪れたプロティノスを迎えたのは、ゲミナという名の貴族身分の女性である。ゲミナの庇護の下、プロティノスの周囲には貴族や文人が集まり、ここにプロティノスを中核とする哲学サークルが形成された。

プロティノスによれば、真の哲学者は肉体上の利点には関心を持たないし、世俗的な支配権も放棄してしまうという³⁹⁾。また、人の死や殺人も、都市の占領や略奪も、舞台の上の劇のようなものだ、ともいう⁴⁰⁾。だが、かくいうプロティノスも、世俗的な権力や権威と無縁であったわけではない。

もしプロティノスがペルシア遠征に参加したなら、それが一兵卒としての従軍であったとは当然考えられない。それは、哲学者という資格で、皇帝の友人や取り巻きの一人としての参加だっただろう。つまりそれは、皇帝に接近できるような世俗的な威信や権威を持っていたということの意味する⁴¹⁾。

中央政界との関わりという点では、有名な「プラトノポリス」のエピソードがまず想起される。プラトンの法制に従った都市をイタリアに創建しようというこの試みは、当時の

皇帝ガリエヌスとその妻サロニナの関心を惹いたが、結局反対に遭い頓挫したという⁴²⁾。また、ローマの有力者との関わりを見るなら、死んだ貴族の孤児を預かり遺産の後見人となったという話も加えるべきである⁴³⁾。このような、皇帝家や貴族層との交流を考えると、ローマ移住後のプロティノスも、貴族社会の社交界の一員として信頼を得ていたことがわかる。

ポルフュリオスが伝えるには、プロティノスのもとに足繁く通った熱心なメンバーの中には、五人の政治家がいたという。その内、ロガティアヌス、サビニルス、オロンティウスの三人はローマの元老院議員だった。ロガティアヌスは、プロティノスに傾倒し、元老院議員としての財産と官職を捨てたことで知られる⁴⁴⁾。このロガティアヌスは、同名の241年の軍事指揮官、254年のアジアのプロコンスル（属州総督）と同一人物なのかもしれない⁴⁵⁾。サビニルスはおそらく266年に皇帝ガリエヌスと共に正規コンスルに就いた有力者である⁴⁶⁾。オロンティウスについて他の情報は残されていない。

これら元老院議員三名を除いた残り二人の政治家は、ゼトスとカストリキウスという。ゼトスは政治的な野心を持っており、それをプロティノスが哲学的な探求へと呼び戻そうとしたと伝えられる。またゼトスは、後にプロティノスが隠遁することになるカンパニアに土地財産を所有していた。これは、本来カストリキウスが所有していたものであるという⁴⁷⁾。

プロティノス・サークルのメンバーの内、哲学的に重要であったのは、エトルリア出身のアメリウスとフェニキア出身のポルフュリオスである。アメリウスは後にシリアのアパメイアへ移住したというが、その後の活動は不明である⁴⁸⁾。また、ポルフュリオスも、療養のためシチリアへ渡ってからの足取りは辿れず、自身弟子を取ったのか、サークルや学団を形成したのか、この点の確認はできない。次に新プラトン主義者たちの足跡が確認されるのは、東方のシリアや小アジアにおける、イアンブリコスの流れを汲む学団においてである。

②イアンブリコスとその学徒たち

イアンブリコスは、240年代にコエレ・シュリアのカルキスで、エメサを統治した一族に由来する裕福な家庭に生まれ、おそらく彼自身も富裕な土地所有者であったと考えられている。ポルフュリオスと共に学んだ後、イアンブリコスはシリアのアパメイアで自らの学団を結成した⁴⁹⁾。新プラトン主義をオカルト主義や神秘主義へと墮落させた人物との烙印を押されてきたイアンブリコスではあるが、これまでの研究動向を考慮すると、このような見方には修正を加えるべきだろう。イアンブリコスは、確かにエジプト人の秘儀やカルデアの神託に関心を持っていたが、そればかりではなく、プラトンやアリストテレスの探求者でもあった。また、新プラトン派における教育カリキュラムの導入など、後代の新プ

ラトン派（特にアテネのそれ）への影響が確認されている⁵⁰⁾。

皇帝ユリアヌスの書簡集の中に混入したイアンブリコス宛書簡を書いた人物（おそらくイアンブリコスの元弟子）は、リキニウスとコンスタンティヌスが交戦していた時、リキニウス側の宮廷に入っていた⁵¹⁾。イアンブリコスの学団はリキニウスの宮廷と密接な関係にあったのではないかという指摘もなされている⁵²⁾。また、ヨハネス・ストバイオスによる抜録という形で残されたイアンブリコスの手による書簡からは、秘儀や神秘主義に関心を寄せるものとはまた別のイアンブリコス像が現れる。これらの書簡でイアンブリコスが表明するのは、統治者がなすべき善についてであったり、あるいは法の重要性といった、政治的な徳に関わる意見なのである⁵³⁾。イアンブリコスがこれらの書簡を送った人物の一人、デウスコリオスは、おそらく元弟子で政治家だろう⁵⁴⁾。プロティノス同様、イアンブリコスの周囲にも政治家の姿がいくらか見え隠れしている。

イアンブリコスは325年頃に没したとされる。その死後すぐに、もしかすると既に存命中に、イアンブリコスは「神格化」された存在となった。実際、後代のレッテルとは逆に、古代末期東地中海世界におけるイアンブリコスの名声と評価には軽視できないところがある。彼は、新プラトン主義者の中で、最初に「神のごとき (θεῖος)」という形容句を冠された人物である。哲学と哲学者に神聖性と宗教性を求める古代末期の異教徒たちにとって、イアンブリコスは重要な位置を占めていた⁵⁵⁾。サルデイスのエウナピオスは彼を重視し、皇帝ユリアヌスが関心を寄せた。四世紀には、このイアンブリコスに端を発する一連の哲学者たちが姿を現し、彼らの活動はエウナピオスの『哲学者・ソフィスト列伝』によって現在にまで伝えられるに至った。そして、このイアンブリコス「学派」⁵⁶⁾の哲学者たちこそ、テミスティオスの同時代人なのである。

イアンブリコスの直弟子の内、政治的な活動に関与したのはソパトロス⁵⁷⁾とエウスタティオスである。ソパトロスは、「生まれつき威厳を備え、偉大な魂の持ち主であったから、他の俗人たちとつき合っていることに我慢がなら」ず、コンスタンティヌスの宮廷に自ら赴いた。コンスタンティヌス一世の宮廷に入ってから、助言者として影響力を振るい、同帝の目的と直情性を理性によって御し改めさせようとしたという。330年にはコンスタンティノーブルの落成を記念する式典の監督を務めたとも伝えられる⁵⁸⁾。しかし、結局は宮廷内の陰謀の犠牲となり、穀物輸送船を風を止めることで足止めしたという嫌疑で処刑された⁵⁹⁾。この話の真偽のほどは不明であるが、少なくともエウナピオスの耳に届いた時にはこのようなヴァージョンになっていたのだろう。もう一人のエウスタティオスは、358年にコンスタンティヌスの息子コンスタンティウス二世の外交使節としてペルシア宮廷に赴き、シャープール二世に王衣を哲学者の衣装に替えようという気をおこさせたという⁶⁰⁾。エウスタティオスは妬みや嫉みを買うことがなかったようだ。

ここからはイアンブリコス学派の第二世代へと移る。まず、上記ソパトロスのおそらく

息子であるソパトロス 2⁶¹⁾ が挙げられる。このソパトロス 2 は異教徒の哲学者であり、リバニオスの文通相手にしてアパメイアの都市参事会員であった⁶²⁾。皇帝ユリアヌスがヒエラポリスを訪れた際、彼をもてなした人物であり、以前にもコンスタンティウス二世やガッルスに対して同じ様にホスト役を務めたことがあるという⁶³⁾。このソパトロス 2 が自分の兄弟であるヒメリオスに宛てた書簡が残っており、ヒメリオスは何らかの官職に就き政治的・行政的な権力を担ったようである⁶⁴⁾。ヒメリオスには息子がおり、おそらくカルキスのイアンブリコスにちなんで、イアンブリコスと名付けられた⁶⁵⁾。

イアンブリコス学派第二世代の哲学者の内、重要なのはアイデシオスの弟子たちである。イアンブリコスの直弟子の一人アイデシオスは、ソパトロスが宮廷に入ってから後、学団の指導的な役割を引き継いだ。ある時アイデシオスに神託が下り、人間たちの町の中での名誉を得る生と、山羊や牛の世話をする生との二つの道が示され、彼は後者を選んだが、彼の知を求める人々から強制されて前者の生き方に戻り、小アジアのペルガモンで弟子を取った⁶⁶⁾。そして、351年、将来の皇帝ユリアヌスがアイデシオスのもとを訪れたのだった。この頃にユリアヌスと面識を得たアイデシオスの弟子たちとは、クリュサンティオス、ミュンドスのエウセビオス、エフェソスのマクシモス、そしてプリスコスといった面々である。ユリアヌスは自分が単独皇帝となると、彼らイアンブリコス学派の哲学者たちを宮廷へ招き寄せた。この内、クリュサンティオスはリュディアの町サルデイスの参事会員家系の出であり、エウナピオスの師にあたる。クリュサンティオスはユリアヌスの招きには応じなかったが、リュディアで祭司としての務めを果たす程度のことはした⁶⁷⁾。マクシモスとプリスコスの二人はユリアヌスの招きに応じ宮廷入りし、多くのソフィストと共にユリアヌスのペルシア遠征に同行した⁶⁸⁾。しかしユリアヌスが戦死すると、マクシモスは、多額の罰金刑を課されるなど多くの人から非難と攻撃を受け、その中で彼の妻は自殺した。クレアルコス⁶⁹⁾によって一度は救われたマクシモスは再びコンスタンティノープルへと向かったものの、今度は陰謀事件に巻き込まれて再度逮捕され、今回はフェストゥス⁷⁰⁾によって処刑された⁷¹⁾。その一方、プリスコスは、逮捕はされたものの釈放され、ギリシアへ戻ることを許されたという⁷²⁾。

イアンブリコス学派第三世代には、ユリアヌスやエウナピオス自身が含まれるだろう。この世代で他に政治的に傑出した可能性があるのは、ユリアヌス同様マクシモスの弟子に当たるサルスティオスである。彼はユリアヌスと縁があり、ガリア道かあるいはオリエンス道の長官にまで登った有力者である⁷³⁾。

イアンブリコスから発する学派は、第三世代に至る頃には霧散してしまい、この後の五世紀に、新プラトン主義哲学者の系譜が確認されるのはアテネにおいて、となる。紙幅の都合から、ここで新プラトン主義者側の政治活動については一旦筆をおきたい⁷⁴⁾。

以上のことから、新プラトン派の哲学者も政治の世界に無縁・無関心であったわけでは

ないことは確かである。古代世界の哲学者は基本的に、社会的には威信あるエリート階層に属している。従って、その周囲に政治家の姿が見られても、政治的な活動をする人物とのつながりがあっても、不自然なことではない。同時に哲学者自身も政治的・行政的な問題に無関心というわけでもない⁷⁵⁾。また、エウナピオスが伝えるように、自ら政治の舞台へ手を伸ばす哲学者もいたのである。

テミスティオスもまた「哲学者」でありながら政治家となることを選び、そして彼は破滅することもなく生きながらえ、成功することができた。そのテミスティオスの「哲学」はなにより政治的实践と結びついたものである。ここからはテミスティオスの主張する「哲学」観をたどる。

5. テミスティオスにおける「哲学」

既に述べたように、テミスティオスは「哲学者」を名乗りつつも政治の世界へ足を踏み入れた。彼の唱える「哲学」のあり方とは、政治的实践と不可分に結びついたものだ。これは、テミスティオスがコンスタンティノープル都市長官という政治的キャリアの頂点にあった時点での発言である。

私〔テミスティオス〕は古の哲学者たちの中でも最も聞こえ高い者らを範としました。彼らは哲学には二つの道があることを、一方はより神的なものの、もう一方は公的な事柄にとってより有益なものがあることを示しています。私は、私個人の事のみを探求する方よりも、あなたたちにとって有益である方を重視しました。私はポリテイアの内にある哲学を選んだのです。私は、ソクラテスとアリストテレス、そして彼らより以前の讃えられし七賢人に従うのです。彼らは、実行を言葉に混ぜ合わせ、哲学は公的な事柄に対して無益なものでも貢献できないわけでもないことを示して見せたのです⁷⁶⁾。

この箇所からは、哲学には神的な事柄に関わるものと公的で人間的な事柄に関わるものの二種類がある、しかしその内後者のポリテイアの只中にある実践的で政治的な哲学を選ぶべきである、実践的な哲学（とりわけテミスティオスにとってはアリストテレス哲学）を重視する、というテミスティオスの奉じる「哲学」の姿が読み取れる。

テミスティオスが言うには、哲学には神々に関わることと人間に関わることとの二つの部分がある。前者、神々に関わる方の哲学とはすなわち、星々や天体の運行、気象現象に関わること、雪はなぜ白いか、虹の正体とは何か、海はなぜ塩辛いのか、といった問題である。このような事柄は学校の弟子たちのために取っておけばいい。哲学が語るべきは後者

の人間に関わること、つまりいかにすれば人や家が幸福になりポリスが栄えるのか、といったことだ、と⁷⁷⁾。

テμισティオスの奉じる「哲学」とは、なにより人間的な事柄、ポリスや実践に関わるものである。古の七賢人たちは、三段論法や形相にまつわる議論、詭弁論法に通じていたために賢人と讃えられたのではない。また、太陽や月の運行を明らかにしたからでもない。法を制定し、なすべきこととなすべきでないことを教示し、人間とは社会的で市民的な存在であり、それ故人間にとっては祖国と法と政体とに配慮することがふさわしいと教えたから、そして教えるだけでなく自ら実践してみせたから、彼らは賢人と呼ばれたのだ。これこそが、「哲学の原初の生誕 (ἡ πρώτη γένεσις φιλοσοφίας)」であると、テμισティオスは述べる⁷⁸⁾。

そして、ソクラテスは人間やポリスに関わる徳を問題とし、人間の限界を超えた自然界や宇宙のことは探求しなかった。しかし、プラトンは、天賦の才に恵まれかつ高邁であったため、計算術や音楽、天文学といった分野にまで手を伸ばして、哲学を多くの供え物で飾り立てた。アリストテレスは、好奇心と詳細さの点ではプラトン以上であったが、それでも人間的な善を避けることなく、そのために力を尽くし従事した。アリストテレスによれば、私たちが哲学するのは、公正なものを知るためではなく、可能な限り実行するためである⁷⁹⁾。幸福は、一人の人間の内にあっても望ましいものだが、ポリス全体の内にあるならより大きく完全である⁸⁰⁾。それ故、その探求は政治的なものであり、善くあるということ (τὸ εὖ πράττειν) は実行することなしには (ἄνευ τοῦ πράττειν) 不可能である。この全宇宙を導く神とその神と共にいる従者らは実践的で政治的な哲学を哲学し、永遠に不変で混じることのない自然全体を守っている。これが、テμισティオス流の「哲学史」である⁸¹⁾。

テμισティオスが人生と学知の範としたのは (ὄν προϋπαξιάμην τοῦ βίου τε καὶ τῆς σοφίας) まさにアリストテレスである⁸²⁾。そして、なにより政治的な実践を重視している。テμισティオスは「美わしの都 (καλλίπολις)」コンスタンティノーブルのために、政治活動を行ってきた。若者であった時から彼は、「隅の方にある哲学 (τὴν ἐν ταῖς γωνίαις φιλοσοφίαν)」を選ぶことはしなかった⁸³⁾。そして、コンスタンティノーブル都市長官就任時にも、昔から絶やすことのなかった習慣を完成させながら、政治的な徳の山麓から頂上へと動じることなく登った⁸⁴⁾。

だが、既に述べたように、テμισティオスは同時代人たちから、彼の言う「哲学」の実践のために批判され、「哲学者」としての資質を疑われた。曰く、テμισティオスは哲学に新奇なものを加え、新しい神を持ち込んでいる。おとなしく部屋の中で弟子たちとのみ語ることをしない。代わりに、人前に出てきては、ポリスの中心に姿を見せることも厭わず、あらゆる人々の前で語ろうとする。さらには、自分で聴衆を集めて称賛を博する。テミス

ティオスがソフィストであるということを示すのに、他にどのような証拠が必要なのか、と⁸⁵⁾。この批判に対して、テミスティオスは次のように反論する。聴衆の幸福のために人前で語る者は、ソフィストではなく、プラトンが言う意味での「政治家」である⁸⁶⁾。そして、新しいものを付け加えることは悪ではない、事実、古来より哲学にも何かが付け加えられてきたのだ、と⁸⁷⁾。哲学者は多くの人々と対話することを拒んではならないし、どうすれば人や家が幸福になりポリスが栄えるかを公に語らねばならない、テミスティオスはこう主張する⁸⁸⁾。

哲学者は公に語らなければならない、これはテミスティオスが常に主張するテーマである。まだ政治家に転身する前にニコメディアで披露された作品でも、哲学とレトリックの混合を唱えている。すなわち、哲学は厳粛で、快さと優美を欠いている。レトリックは、憤みという轡を欠いているので、狂乱して無秩序に陥る。だから、両者は共に歩みを進めるべきだ、と⁸⁹⁾。また、テミスティオスの元老院編入を命じるコンスタンティウスの書簡状では次のようにある。テミスティオスは、「共有されない哲学、非社交的な哲学(φιλοσοφίαν ἀκοινωνήτων)」を探究することはしない。望む者に哲学を分け与える。古の賢人らの解釈者にして哲学という神殿の祭司であり、古の名声を新しいものとする。人々が理性に従って生き教養に配慮することに、テミスティオスは責任を持っている。哲学者は、あらゆる人の審判者にして監督者である。テミスティオスは、我々によってローマの栄誉に与り、代わりにギリシアの英知をもたらし、類稀な哲学者にして我々がポリス(コンスタンティノープル)の選ばれた市民、世界の市民である、と⁹⁰⁾。

テミスティオスは皇帝・宮廷の側から「哲学者」として称えられたのだが⁹¹⁾、皇帝権力との結び付きも周囲からの批判を和らげられなかったのか、それとも、それが原因で批判を招いたのか。テミスティオスが359年にコンスタンティノープルのプロコンスル職を退いた直後の作品とされる⁹²⁾第23弁論「ソフィスト」からは、この時もテミスティオスは「ソフィスト」との批判を受けたことがわかる⁹³⁾。批判を招いた原因は、やはりテミスティオスが大勢の聴衆の前で弁舌を披露し好評を博したことによるという⁹⁴⁾。この弁論でのテミスティオスの応答は、プラトンの対話篇『ソフィスト』から「ソフィスト」の定義を引き出し、その定義に自分が当てはまらないと主張することだった⁹⁵⁾。このように、テミスティオス流の「実践的な哲学」の実践は、「論敵たち」に付け入る隙を与えたのである。

以上は「哲学者」テミスティオスに向けられた批判である。ここからは、テミスティオス自身が同時代の他の哲学者に向けた批判に焦点を当てよう。

ソクラテスの血統に由来する者たちは完全に死に絶え、今では消え去ってしまっています。というのも、なぜ彼らがアゴラを、男たちがその名を挙げる場と詩人[ホメロス]が言うアゴラを⁹⁶⁾恐れ用心しているのか、そして寝椅子と隅から外へと身を乗り

出そうとしないのか、私〔テμισティオス〕にはわかりません。そうして彼らは祖先たちのことを忘れ去ってしまっているのです、その祖先たちが仕事場で、柱廊や浴場や劇場で多くの人々と論じ合っていたということを、そしてそのことのために、学校へ通う者たちを自らの方へ引き寄せ手中にしたばかりか、革細工師を革から、高利貸しを両替屋から、姦夫を売春宿から連れ出したということを。〔祖先たちは〕人間愛の故にオリュンピアへ、イストモスへ、アイギナへ、エレウシスへと経巡り、自ら神々と共に多くの人々に対しく…>果たした。だが、それ以来、〔ソクラテスの血統に由来する者たちは〕まるで盗人か追剥のように<アゴラの>中央を避けく…>そして信用を失っています…⁹⁷⁾

テμισティオスは、この「ソクラテスの後裔たち」を古のあるべき場所へと連れ戻したいと述べる。つまり、同時代の哲学者たちを「象牙の塔の哲学」から引き離し、テμισティオスの唱導する「実践的で政治的な哲学」、「ポリテイアの内にいる哲学」、本来あるべき「哲学」へと連れ戻したいということである。しかし、テμισティオスによると、この「ソクラテスの後裔たち」の性格は、「頑固で、意固地で、強情 (σκληρὰ καὶ αὐθέκαστος καὶ ἀτενής)」である。そして、金以上に言葉を節約して、言葉に関して吝嗇である。ごく少数の人としか言葉を交わさず親しく接しない。更に、自分たちが認める人物への賛辞は妥当だが、口達者で（言葉を）浪費する者たちの賛辞は不適當と考えるほどに高慢である、という⁹⁸⁾。

一般的には、テμισティオスが批判している「ソクラテスの後裔たち」とは新プラトン主義者、特にイアンブリコス学派の哲学者たちであると考えられている⁹⁹⁾。ただ、テμισティオスは上で引用した箇所において、誰か特定の人物を名指しで非難することはしない。だから、具体的に哲学者の中で誰がテμισティオスの「論敵」であったのかも明確に知ることはできない。ここでは、テμισティオスがある一人の人物について取り上げている箇所をみてみよう。

その名を明かすことなくテμισティオスが言及するこの人物は、シキュオンの出身であり、真に哲学を備えた者であるという。この人物は、カルキス人、すなわちイアンブリコスが老齢に至った頃にその弟子となった。しかし、彼は新しい歌ではなく、アカデメイアやリュケイオンの父祖伝来の古の歌に従事したという¹⁰⁰⁾。つまり、このシキュオン人は、イアンブリコスの弟子でありながら、「新しい歌」、すなわち当時隆盛の新プラトン主義的な哲学には同調しなかった¹⁰¹⁾。テμισティオスは、イアンブリコス学派の哲学者の内の誰をここで具体的に批判しているのかを明かすことはないが、おそらく新プラトン派のといった態度とは相容れない考えを持っている（ただし、テμισティオスを「ソフィスト」と非難した者たちが、新プラトン派の哲学者であったかどうかは不明である）。だが、逆に新プラトン派がテμισティオスをどう見たのか、この点を残された史料から知ることは難しい。

エウナピオスとその『哲学者・ソフィスト列伝』において、テミスティオスの名前すら言及せず、まるでテミスティオスが存在しなかったかのようにしていることは周知のとおりである¹⁰²⁾。

最後に、ユリアヌスがテミスティオスに宛てた書簡を取り上げたい。これは、テミスティオスの「哲学」観に対する、唯一の同時代人による明確な反応である。ユリアヌスによると、テミスティオスはユリアヌスに対し、屋内の哲学から屋外の哲学へ移るように言い、哲学的な生よりも実践の生を勧めたという¹⁰³⁾。しかし、ユリアヌスは、立法者や政治思想家のように知性や理性の働きによって行為・実践する者と、実際に政治的な活動を行う者とでは、実践の意味が異なるのではないか、との疑問をテミスティオスに提出している¹⁰⁴⁾。この書簡からは、テミスティオスとユリアヌスとの間に距離感があったことは読み取れる。ただ、実際の両者の関係が陰悪であったのか、それとも見解の相違という次元に留まるものであるのかは、やはり不明とせねばならない¹⁰⁵⁾。

テミスティオスの「哲学」観とは、以上のように政治的な実践を旨とし、人間社会の幸福のために人々の前で語りかけることを使命とするものであった。そして、テミスティオスの目から見れば、同時代の新プラトン主義哲学は、「非社交的」で「象牙の塔の中の」哲学に見えた。最後に、政治活動に対する理念と実践に関する、テミスティオスと新プラトン派との間の距離感を取り扱うこととする。

6. 「哲学」観の衝突？

テミスティオスは、同時代の新プラトン主義者とは思っても信条も共有していないというのが研究者の共通見解である。新プラトン主義者たちも、「政治的な徳（πολιτική ἀρετή）」に関心がないわけではない¹⁰⁶⁾。ただ、彼らにとって実践に関わる徳とは、より上位の観想に関わる徳へ至るための最初のステップなのである¹⁰⁷⁾。従って、実践よりも観想が上位を占める。また、新プラトン派において、アリストテレスの哲学は、プラトンの対話篇に進む前の予備段階という位置づけを得ていた¹⁰⁸⁾。このことは、必ずしもアリストテレスの軽視を意味するものではないが、それでもアリストテレスをプラトンに従属させてはいる。彼らとは逆に、テミスティオスは「象牙の塔」の中の観想よりも、人前で公に語る実践を重視し勧める。そして、テミスティオスが範としたのはアリストテレスの哲学である。もちろん、これはプラトンを排斥するものではない。テミスティオスの弁論からは、彼がプラトンの著作にも通じていたことがわかる。しかし、彼が言うには、プラトンが拡張した哲学は、本来の哲学とは異なる領域のものである。彼が選んだのはアリストテレスであった。このように、実践と観想、アリストテレスとプラトン、どちらに関してもその優先順位の付け方はテミスティオスと新プラトン派では逆をいく。

テミスティオスは政治的な活動を自らするという意味での「実践的な哲学」を実践し、新プラトン主義哲学を「屋内の哲学」、「隅に置かれた哲学」として批判した。しかし、「哲学」観を別にすると、新プラトン主義者の中にも政治の舞台へ登った者はいたのではなかったか。しかもそれは、エウナピオスの伝える、イアンブリコス学派の、つまりテミスティオスと同時代の哲学者である。

ソパトロスは、「生まれつき威厳を備え、偉大な魂の持ち主であったから、他の俗人たちとつき合っていることに我慢がなら」ず、コンスタンティヌスの宮廷に自ら赴いた¹⁰⁹⁾。また、マクシモスとプリスコスも、ユリアヌスの招きに応じて宮廷へ向かった。二人の師にあたるのはアイデシオスである。アイデシオスは一般的な感覚を備えた人であり、弟子の頑固さや思い上がりを正そうと努め、野菜売りの女や織物師のような身分の低い人とも言葉を交わす人当たりのよい人物であったという。しかし、プリスコスは、師アイデシオスに対し、面前で「哲学の威信に対する裏切り者と呼び、また、魂の向上には役立つかも知れぬが、実際の生活では守られていない小理屈に習熟している人間」と非難した。だがその一方で、プリスコスは軽率な発言を慎む控えめで慎重な性格の人物でもあったといい、宮廷にやって来てからもお追従に動じることなく高慢にもならず、ユリアヌス死後も無事釈放された¹¹⁰⁾。しかし、もう一人のマクシモスは悲劇的な結末を迎えた。ユリアヌスの招きに応じコンスタンティノープルへとやって来たマクシモスは、哲学者にはふさわしくない豪華な衣服を身に纏うようになり、徐々に気難しくなっていた。そして、ユリアヌスが死ぬとマクシモスは後ろ盾を失い、陰謀事件に巻き込まれて再逮捕され処刑された¹¹¹⁾。このように、イアンブリコス学派の哲学者たちの中にも、不首尾に終わったとはいえ、政治の世界を選んだ者はいたのである。それでは、実践の次元において、テミスティオスと彼らとの違いはどこに見出せるのだろうか。

テミスティオスが言うには、「ソクラテスの後裔たち」は人前で語ることを避ける。そして、その性格は「頑固で、意固地で、強情」であり、言葉を節約して多くを語らず、高慢である。実際にはどうなのだろうか。まず、イアンブリコス自身、「政治に通じている人のように説明することには適していなかったし、そうする気もなかった」¹¹²⁾。ソパトロスは「他の俗人たちとつき合っていることに我慢がならなかったので」宮廷に入った¹¹³⁾。また、マクシモスにも自分が他の多くの者より優れているとの自意識があったようである。そして、競争心が強くて打ち負かし難い。しかし、観客向けの弁論には生来不向きであり、民衆向けの弁論では名声を得ることができなかった¹¹⁴⁾。プリスコスは、率先して自分の意見を述べるタイプの人ではなく、軽々しく見解を述べる人のことを浪費家と呼んだ。慎重な性格である一方で、市井の人とも言葉を交わす師アイデシオスに対しては、哲学の威厳を損なわせていると非難した¹¹⁵⁾。テミスティオスが戯画化した哲学者像は、概ねイアンブリコス学派の哲学者に当てはまるのではないだろうか。エウナピオスでさえ、マクシモスと

プリスコスには公的な活動の経験がないと述べている¹¹⁶⁾。新プラトン派の哲学者も確かに政治の舞台へ足を踏み入れたのだが、テミスティオスとは違って、彼らは弁論によって自己の立場を擁護することにも、多くの人と接することにも不向きだったようだ。ユリアヌスの時代には、テミスティオスが後景に退いた一方で、テミスティオスとは共感を抱くことのない新プラトン派の哲学者が代わりに表舞台へと姿を現した。結局、ユリアヌスという後ろ盾を失うと、彼らは早々に立ち去らざるをえなかったのだが、マクシモスやプリスコスがコンスタンティノーブルにやって来た時、そして彼らが追いやられた時、テミスティオスはどのような感慨を抱いたのだろうか。

テミスティオスは、366/7年冬にコンスタンティノーブルで披露された第7弁論において、多額の罰金刑を課されたマクシモスに言及している。テミスティオスが言うには、マクシモスは危うく殺される場所だったが、罰金刑のみで済んだ。しかし、この判決も皇帝側の判断によるのではなく、教養人には生じるのが常である無分別の故である、という。それは、プリスコスの方は告発されてもすぐに解放されたことから明らかだ、と。マクシモスも、今ではソクラテスの剛毅さを示した。というのも、飢餓に陥っているにもかかわらず、マクシモスはプロコピウスの反乱に加担せず、ウェアンス帝のもとでの境遇を耐えるほうを選んだから、と¹¹⁷⁾。この弁論が発表された時点での背景を考慮しておこう。ユリアヌスの親類であるプロコピウスは、365年に皇帝を名乗り、366年に処刑されるまでコンスタンティノーブルを拠点にウェアンスに抵抗していた。この第7弁論の目的は、プロコピウスを支持したコンスタンティノーブル市民の行為を弁明することである。ここでマクシモスが登場するのも、この点と関わりがある。この文脈で重要なのは、おそらく、ユリアヌスの師であるマクシモスが、ユリアヌスの血縁者に協力しなかったという点だ。プロコピウスの温和さを求めなかったのだから、マクシモスがウェアンスの温和さに与ることは正当である、そして、哲学の残り火を留め置くことは善いことである、こうテミスティオスは述べる¹¹⁸⁾。ここで問題とされるのは、政治的な立場であって、哲学のあり方ではない¹¹⁹⁾。これより後、ウェアンスの即位五周年を記念する368年3月28日の第8弁論では、ウェアンスの息子ウェアンティニアヌス・ガラテスの教育を将来テミスティオスが引き受けようと言われる、「私が彼をアレクサンドロスにしましょう」と¹²⁰⁾。そして、道化者がこの皇太子を逸脱させることもないし、奇跡を起こす者が驚かせることもない、と。これもやはり、ユリアヌスとその師であるマクシモスへのあてこすりだろう¹²¹⁾。新プラトン主義においては、このような奇跡を起こす業や神を呼ぶ業が¹²²⁾一定の地位を占めていたのだが、テミスティオスにはこれらへの関心が見られない。それに、キリスト教の影響力の及んだ宮廷にあっては、こういった事柄への関心は政敵がつけている格好の口実だったろう。

テミスティオスは、マクシモスやプリスコスのことを知ってはいたのだが、残された史料において言及があるのは、二人が失脚して後のものである¹²³⁾。また、プリスコスに関してはごくわずかなものであり、マクシモスに対しても彼の哲学の実践について問題にする

ことはしない¹²⁴⁾。このように見ると、たとえ政治の世界に足を踏み入れたとしても、双方の隔たりはなお大きいというべきであろう。

四世紀が過ぎ五世紀を迎えると、キリスト教会の存在感は増していき、「異教側の聖人たち (pagan holy men)」, すなわち哲学者たちは徐々に社会の周縁に追いやられていった。この頃の哲学者たちがキリスト教会の対抗者としてみなされていたことは周知のとおりである。しかし、当時の新プラトン主義者の多くは、隠遁を好み、脱世俗的な傾向が強かった。実社会への関心と関与を完全に捨て去ったわけではないにしても、新プラトン派は閉鎖的で、また秘儀秘教的な傾向も強かった。ソパトロスやマクシモス、プリスコスの性格からわかるように、彼らにはエリート主義的な性向があり、世俗一般の人々との交友も薄かった(イアンブリコス学派に共感を持っているはずのエウナピオス自身もがそう認める)。ガス・ファウデンは、キリスト教会に対する異教徒陣営におけるリーダーシップの欠如を指摘する。四世紀の東方地中海世界には、西方におけるローマの元老院貴族のように強力な「抵抗勢力」が存在せず、しかも、テミスティオスと新プラトン派が決して相容れなかったように、知識人同士の間に深刻な亀裂が走っていた。これが哲学者の周縁化の原因であるという¹²⁵⁾。そして、イアンブリコス学派の哲学者と比べれば成功したといえるテミスティオスにも、後続は現れなかった。彼のように「政治的な哲学」を唱導し実践した異教徒の哲学者は、テミスティオス以後二度と出現しなかったのである。

7. おわりに

テミスティオスは「哲学者」であることで、異教徒とキリスト教徒との間の媒介者となったのだろうか。テミスティオスは、宗教的には寛容論の立場をとったことで知られる。彼はヨウミアヌスに捧げた第5弁論において、権力による信仰の強制を批判し、神学上の問題に関して皇帝側に訴え出てくるキリスト教徒を、神ではなく皇帝の緋衣を崇めているものとして断じたとされる¹²⁶⁾。教会史家のソクラテス・スコラスティコスやソゾメノスの著述の中では、テミスティオスは、同質論者のキリスト教徒を迫害するウェアレンス弁論によって諫めてもいる¹²⁷⁾。キリスト教徒にとってのテミスティオスは、皇帝に対しても意見を直言するまさに「哲学者」だったようだ¹²⁸⁾。

しかし、同じ異教徒たちの中でのテミスティオスはそうではない。理論の面でも実践の面でもテミスティオスと新プラトン主義者が平行線を辿ったことは、上述のとおりである。また、彼はコンスタンティノープルの大立者でもある。この「新しいローマ」は東地中海世界の人や富を吸い上げながら成長した都市として、リバニオスやエウナピオスが軽蔑した都市である¹²⁹⁾。リバニオスはテミスティオスの「哲学」観を問題にすることはしないが、テミスティオスがコンスタンティノープルのプロコンスルに就いていた頃(358～359年)、

同市の代表者としてのテミスティオスの影響力に懸念を示している¹³⁰⁾。エウナピオスは、イアンブリコス流の新プラトン主義に同調しない「異教徒の異端」としてその著述からテミスティオスの存在を抹消した¹³¹⁾。異教徒側における亀裂はやはり大きいというべきではないか。

またテミスティオスは、アンティオケイアやサルデイスのような伝統を誇るポリスにおける潜在的な批判者だけでなく、コンスタンティノーブルの内部にも批判者を抱えていた。すなわち、人前で公然と弁舌を振るい聴衆を集め名声を求める「ソフィスト」である、との批判だった。このような非難を行った人物が、異教徒なのかキリスト教徒なのか、哲学者なのか政治家なのかは不明であるが、テミスティオスによる自作自演とはやはり考えられない。コンスタンティノーブル市内においてテミスティオスはいかなる存在であったのか、また東ローマ世界において具体的にどのような集団の仲介者であったのか、これらは別個に検討すべき課題であるが、それは他稿を期す。

※テミスティオス『弁論集』の底本はトイブナー版, H. Schenkl, G. Downey et A. F. Norman, *Themistii Orationes*, 3 vols. Leipzig, 1965 - 74 を用い, 特に注記しない場合はトイブナー版の校訂に従った。

※Frequently cited works:

Dagron (1968) = G. Dagron, *L'Empire romain d'Orient au IVe siècle et les traditions politiques de l'hellénisme: Le témoignage de Thémistios*. Travaux et mémoires (Centre de recherche d'histoire et civilisation byzantines) 3, Paris, 1968.

Fowden (1982) = G. Fowden, 'The Pagan Holy Man in Late Antique Society,' *Journal of Hellenic Studies* 102 (1982), 33 - 59.

Heather (1998) = P. Heather, 'Themistius: A Political Philosopher', in: M. Whitby (ed.), *The Propaganda of Power: the Role of Panegyric in Late Antiquity*, Leiden; Boston; Köln, 1998, 125 - 150.

O'Meara (2003) = D. J. O'Meara, *Platonopolis: Platonic Political Philosophy in Late Antiquity*, Oxford, 2003.

Penella (1990) = R. J. Penella, *Greek Philosophers and Sophists in the Fourth Century A.D. Studies in Eunapius of Sardis*, Leeds, 1990.

Penella (2000) = R. J. Penella, *The Private Orations of Themistius*, Berkeley, 2000.

PLRE = A. H. M. Jones, J.R.Martindale and J.Morris, *The Prosopography of the Later Roman Empire*, 3 vols. Cambridge, 1971-1992.

Seeck (1906) = O. Seeck, *Die Briefe des Libanius*, Leipzig, 1906 (reprint Hildesheim, 1966)

Stegemann (1934) = W. Stegemann, 'Themistios.' *Real-Encyclopädie der klassischen Altertumswissenschaft* 5, coll.1642 - 80.

Vanderspoel (1995) = J. Vanderspoel, *Themistius and the Imperial Court: Oratory, Civic Duty, and Paideia from Constantius to Theodosius*, Ann Arbor, MI, 1995.

註

1) Them. Or. 34.XIII, ...τὸν κατάλογον τῶν ὁμογενῶν ἀντὶ μὲν τριᾶκοντα ἐπλήρου εἰς δισχιλίους·

2) Heather (1998) p.147.

3) P. R. L. Brown, *Power and Persuasion in Late Antiquity: Towards a Christian Empire*, Wisconsin, 1992, pp.61-70.

- 4) Heather (1998) pp.136-139.
- 5) コンスタンティウス二世と同一年であると述べているため (Them. Or. 1.18a)。
- 6) Them. Orr. 2.28d, 27.333c-d; Demeg. Constant. 21d. まだコンスタンティノープルと名を変える前のビュザンティオンで生まれたという説もある (Seeck (1906) p.291; PLRE i p.889)。
- 7) Them. Or. 5. 63d.
- 8) Them. Or. 27.332d.
- 9) Them. Or. 23.294d, 298d.
- 10) Them. Or.24. see, Dagron (1968) p.7; Vanderspoel (1995) p.43; Penella (2000) pp.22-24.
- 11) Them. Or. 31.352c.
- 12) Lib. Ep. 793.1. 362年の書簡であり、二人はこの時点で12年の付き合いであるという。リバニオスの書簡集には、リバニオスからテミスティオスへ宛てた書簡40通と、別の人物へ宛てた書簡ではあるが文中にテミスティオスの名が見られるもの12通が残されている。テミスティオスによる書簡は残されていない。
- 13) Stegemann (1934) col.1652; Dagron (1968) p.7; Vanderspoel (1995) p.37.
- 14) Dagron (1968) pp.14-16.
- 15) Suda s.v. Θεμιστιος.
- 16) Phot. Bibl. cod.74. ...ἐραστής ἐστι καὶ σπουδαστῆς φιλοσοφίας.
- 17) 詳しくは以下を参照。Vanderspoel (1995) p.2f.
- 18) W. Dindorf, *Themistii Orationes* (Leipzig, 1832; reprint.Hildesheim, 1961), p.xii.
- 19) J. Geffcken, *The Last Days of Greco - Roman Paganism*, trans. by S. MacCormack, Amsterdam, 1978, p.167f.
- 20) この第1弁論「人間愛について、あるいはコンスタンティウス」の発表年代については見解が分かれているが、ゼークがかつて出した見解、つまりコンスタンスへの言及がないことからコンスタンスが殺害されて後という見解にならって、350年をとりたい (Seeck (1906) p.293f)。
- 21) このΔημηγορία Κωνσταντίνουは、本来ラテン語で書かれていたが、ギリシア語に翻訳された形で、テミスティオスの『弁論集』中の第1弁論と第2弁論の間に挟まれて残されている。また、少なくともリバニオスはこの書簡の写しを手に入れている (Lib. Ep.434)。
- 22) 称賛演説については次の拙稿も参照。西村昌洋「テトラルキア時代ガリアにおける弁論家と皇帝：『ラテン語称賛演説集 (Panegyrici Latini)』より」『史林』第92巻2号、2009年3月掲載予定の「第1章：後期ローマ帝国における称賛演説」。
- 23) トイプナー版での区分。これらは写本に由来する呼称ではないが、このような形でテミスティオスの弁論を二つのまとまりに分けること自体は妥当だろう (see, Penella (2000) pp.7-9)。
- 24) 350年代末のテミスティオスのプロコンスル就任は、かつてダグロンによって否定されたが (Dagron (1968) pp.213-217)、その後デイリーがテミスティオスのプロコンスル就任を再度主張した (L. Daly, 'Themistius' Refusal of a Magistracy' *Byzantion* 53 (1983), pp.164-212)。このプロコンスル職の任期については以下を参照, Daly, *ibid.*, pp.187-189.
- 25) Them. Or. 17.214b.
- 26) See above n.1.
- 27) 内一人はコンスタンティウス (Them. Or. 4.54b; Lib. Ep. 66)、もう一人はそれより後の皇帝ではあるが具体的に誰に当たるのかはわからない (Them. Orr. 17.214b, 31. 353a, 34.XIII)。
- 28) Them. Or. 31.353a; Lib. Ep. 66.
- 29) テミスティオスとユリアヌスの微妙な関係については、さしあたり以下を参照。Dagron (1968) pp.230-235; L. Daly, ' " In a Borderland": Themistius' ambivalence toward Julian' *Byzantinische Zeitschrift* 73 (1980) pp.1-11; T. Brauch, 'Themistius and the emperor Julian' *Byzantion* 63 (1993) pp.79-115.
- 30) E.g. Them. Or. 26.313d-314a.
- 31) Dagron (1968) pp.49-54.
- 32) リバニオスやエウナピオスがコンスタンティノープルに対して抱いたような感情である (see

below n.129)。

- 33) ただし、テミスティオスの「論敵」の個性や人格は、残された史料からはごくおぼろげにしかつかめない。テミスティオスが批判されたことを伝えるのは、ほとんどがテミスティオス自身の残した自己弁護的な記述なのである。どのような人物が、どのような理由からテミスティオスを批判していたのか、「論敵」側の証言が残っていないため、詳細を知ることは困難と言うべきであろう。特に、テミスティオスが「哲学者」ではなく「ソフィスト」であるという非難は、テミスティオス自身の証言以外からは確認されない。
- 34) 必ずしも適切な呼称ではないとされるが、イメージを得やすいという理由から、便宜的に新プラトン主義と表記する。
- 35) プラトン『テアイテトス』に由来 (176b)。
- 36) O'Meara (2003) p.3f.がまとめているように。
- 37) E.g. J. Dillon, 'Philosophy as a profession in Late Antiquity', in: A. Smith (ed.), *The Philosopher and Society in Late Antiquity: Essays in Honour of Peter Brown*. Swansea, 2005, pp.1-17.
- 38) Porph. *Vita Plot.* 3, 15-17.
- 39) Plotinos *Enn.* I 4.14.20.
- 40) *Ibid.*, III 2.15.43-53.
- 41) See, R. Harder, *Kleine Schriften*, München, 1960, pp.280-282.
- 42) Porph. *Vita Plot.* 12.
- 43) *Ibid.*, 9.
- 44) *Ibid.*, 7, 31-46.
- 45) L. Brisson et al., *Porphyre: La vie de Plotin*. 2 vols. 1982-92, Paris, i p.109.
- 46) *PLRE* i p.791.
- 47) Porph. *Vita Plot.* 7.
- 48) *Ibid.*, 2.32-33.
- 49) J. Dillon, 'Iamblichus of Chalcis (c.240-325 A.D.)' *ANRW* ii 36.2 (1987) pp.863-875; Fowden (1982) pp.40f, 49.
- 50) J. Dillon (1987) p.878ff.; H. J. Blumenthal, *Soul and Intellect: Studies in Plotinus and Later Neoplatonism*, Aldershot, 1993, pp.15-18; O'Meara (2003) p.62ff.
- 51) T. D. Barnes, 'A Correspondent of Iamblichus.' *GRBS* 19 (1978) pp.99 - 106.
- 52) ディロンの仮説では、このイアンブリコスの元弟子は、皇帝ユリアヌスの母方の祖父でリキニウスの道長官 (Praefectus Praetorio) を務めたユリウス・ユリアヌスだという (J. Dillon (2005) p.15 n.25)。
- 53) O'Meara (2003) pp.87-91, 98-100.
- 54) 323年頃シリアの属州総督だった可能性がある (*PLRE* i p.275)。あるいは、317～324年の道長官 (Praefectus Praetorio) か (*DPA* ii p.915) ?
- 55) だが、イアンブリコスは、全ての人から評価されたわけではない。ユリアヌスが言うには、イアンブリコスの弟子であるアシネーのテオドロスとその一派は、イアンブリコスを「虚栄心が強い (φιλότιμος)」と評した (Julian. *Ep.* 2, Loeb)。また、ダマスキオス『イシドロス伝』によると、少なからぬ哲学者がイアンブリコスを、あるいは「近寄りがたい (ἄβατον)」と、あるいは物事の真理よりも自惚れの大言壮語によって得意になっていると述べた (Dam. *Vit. Isid.* = Phot. *Bibl.* cod.242. 34.)。
- 56) ここでの「学派」とは、哲学的解釈や思想上の立場の統一性に基づくものではない。主たる情報源であるエウナピオス自身が、こういった事柄に関して不正確であるかあるいは関心が薄いためである。本稿では便宜的に、イアンブリコスから発する潮流に連なり、イアンブリコスの教説に影響を受けた哲学者を大まかに指すものとしてこの呼称を用いる。
- 57) *PLRE* i, p.846 Sopater 1.
- 58) Johannes Lydos, *de Mensibus* iv 2.
- 59) Eunap. *VP* 462. (引用は、エウナピオス『哲学者・ソフィスト列伝』戸塚七郎訳、西洋古典叢

書, 254頁)

- 60) *Ibid.*, 465-6.
- 61) *PLRE* i, p.846f. Sopater 2.
- 62) *Lib. Epp.* 627, 633.
- 63) *Julian. Ep.* 58 Loeb, 401b-c.
- 64) この書簡についての議論は以下を参照。D. J. O'Meara, 'A Neoplatonist ethics for high-level officials: Sopatros' letter to Himerios', in: A. Smith (ed.), *op.cit.*, pp.91-100.
- 65) イアンブリコス 2 (*PLRE* i p.451f.)。
- 66) *Eunap. VP* 464-465.
- 67) *Ibid.*, 501.
- 68) *Ibid.*, 478.
- 69) クレアルコスはテミスティオスの友人であり, 当時の有力な政治家である (see, Dagron (1968) p.36 and n.4; *PLRE* i p.211f. Clearchus 1)。
- 70) 『略史 (*Breviarium Rerum Gestarum Populi Romani*)』の作者であるフェストゥスと同一人物であろう (*PLRE* i p.334f. Festus 3)。
- 71) *Eunap. VP* 478-480.
- 72) *Ibid.*, 478.
- 73) *Περὶ θεῶν καὶ κόσμου* の作者であるサルスティウスの人物同定については, 以下二つの可能性が提出されている, (1) Flavius Sallustius (*PLRE* i p.797f. S5) ; (2) Saturninus Secundus Salutius (*PLRE* i pp.814-817 S3) 。以下を参照。E. Clarke, 'Communication, Human and Divine: Saloustious reconsidered' *Phronesis* 43 (1998) pp.347-350. クラーク自身は (2) の方を支持する。
- 74) ただ, 五世紀アテネのプロクロスの聴講者の中には, 多くの政治家や高官が含まれていることは留意すべきである。
- 75) マリノスが伝えるプロクロスの例も参照 (*Marinos, Vita Procli* 15)。
- 76) *Them. Or.* 31.352b-c. (Teubner ii p.188, 10-18) 'Εγὼ τοῖς δοκιμωτάτοις τῶν ἀρχαίων φιλοσόφων ἀκολουθήσας, οἱ δύο εἶναι τῆς φιλοσοφίας ὁδοὺς ἐξηγοῦνται, τὴν μὲν θειοτέραν, τὴν δὲ τοῖς κοινοῖς ὠφελιμωτέραν, τὴν ὑμῖν λυσιτελοῦσαν προετίμησα τῆς μόνον τὸ ἐμὸν ἴδιον ἐξεταζούσης, καὶ ἐν πολιτείᾳ φιλοσοφίαν εἰλόμην, ἐπόμενος Σωκράτει καὶ Ἀριστοτέλει καὶ πρό γε τούτων τοῖς ὑμνουμένοις ἐπτὰ σοφοῖς, οἱ τὰ ἔργα τοῖς λόγοις ἐγκαταμίξαντες οὔτε ἄπρακτον οὔτε ἀσυντελῆ τοῖς κοινοῖς ἐπεδείξαντο φιλοσοφίαν.
- 77) *Them. Or.* 26.327d-328b. この箇所では, 聴き手である「少数の理性ある者たち (ὀλίγοι ἔμφορονες)」の一人が擬人化された「哲学」に語りかけるとい形式をとっている。
- 78) *Them. Or.* 34.III-IV.
- 79) Cf. *Arist. Eth.Nic.* 2.2[1103b26-31], 2.4[1105b9-18].
- 80) Cf. *ibid.*, 1.2[1094b7-11].
- 81) *Them. Or.* 34. V-VI.
- 82) *Them. Or.* 2.26d-27a.
- 83) Cf. *Plat. Gorg.* 485d. 「隅の方にある哲学」すなわち, ヘザー=モンカーの訳では「象牙の塔の中の哲学 (philosophy in an ivory tower)」(P. Heather and D. Moncur, *Politics, Philosophy, and Empire in the Fourth Century: Select Orations of Themistius*, Liverpool, 2001, p.320)。
- 84) *Them. Or.* 34.XII.
- 85) *Them. Or.* 26.313d-314a.
- 86) *Ibid.*, 314d-315a.
- 87) *Ibid.*, 317a-320a.
- 88) *Ibid.*, 323a, 328a-b.
- 89) *Them. Or.* 24.304b-c.
- 90) *Demeg. Constant.* 20a-22c.

- 91) 以下も参照。CTh 6.4.12.
- 92) Seeck (1906) p.300f; Penella (2000) p.19f.
- 93) 「ソフィスト」という言葉には、プラトンの悪名としての「ソフィスト」と、知恵ある者、教師という意味の「ソフィスト」、複数の意味がある。「ソフィスト (σοφιστής)」という言葉にこのような捻れがあることは、帝政期の知識人も知るところだった。四世紀においても同様であり、例えばリバニオスの書簡におけるように、誰かを「ソフィスト」として推薦する際の「ソフィスト」とは当然後者の意味である (以下も参照、田中創「古代末期における公的教師の社会的役割：リバニオス書簡の分析から」『史学雑誌』117, 2008年, 160頁)。しかし、テμισティオスを批判した者はもちろん前者の意味で「ソフィスト」と呼んでおり、よい意味では用いていないことは明らかである (Them. Or. 23.286c)。
- 94) Them. Or. 23.282d-283b.
- 95) *Ibid.*, 288a-b.
- 96) Hom. Il. I.441. (ホメロス『イリアス』(上) 松平千秋訳, 岩波文庫, 286頁)
- 97) Them. Or. 28.341d-342b. (Teubner ii p.170, 17- p.171,7) Οἱ δὲ ἀπὸ τῆς Σωκράτους γενεᾶς εἰκότως ἄρα καὶ ἐν δίκη ἀπεφθίκασι τε καὶ ἀπερρῦκασιν ἐν τῷ παρόντι. οὐ γὰρ οἶδα ὅθεν φρίττουσι τε καὶ εὐλαβοῦνται τὰς ἀγοράς, ἐν αἷς φησιν ὁ ποιητὴς ἀριπρεπείας τελέθειν τοὺς ἄνδρας, καὶ οὐκ ἀνέχονται παρακύπτειν ἔξω τοῦ σκίμποδος καὶ τῆς γωνίας· οὕτως ἐκλελησμένοι εἰσὶ τῶν προγόνων, ὅτι ἐκεῖνοι ἐπὶ τῶν ἐργαστηρίων πρὸς τοὺς πολλοὺς διελέγοντο καὶ ἐν ταῖς στοαῖς καὶ ἐν τοῖς βαλανείοις καὶ ἐν τοῖς θεάτροις. καὶ διὰ τοῦτο οὐ μόνους τοὺς εἰς τὸ διδασκαλεῖον φοιτῶντας προσήγοντο καὶ ἐχειροῦντο, ἀλλὰ καὶ τὸν σκυτοτόμον ἐξανίστων ἀπὸ τῶν σκυτῶν καὶ τὸν ὀβολοστάτην ἀπὸ τῆς τραπέζης καὶ τὸν ἐταιροῦντα ἀπὸ τοῦ οἰκήματος. ἐφοίτων δὲ ὑπὸ φιλανθρωπίας καὶ Ὀλυμπίαζε καὶ Ἰσθμοῖ καὶ εἰς Αἴγιναν καὶ εἰς Ἐλευσίνα καὶ ἐτέλουν δὲ καὶ αὐτοὶ μετὰ τῶν θεῶν < * * * > τοῖς πολλοῖς ἀνθρώποις. ἐξ οὗ δὲ ὥσπερ οἱ φῶρες καὶ λωποδύται φεύγουσι τὰ μέσα < * * * > τοῦ ὀργάνου οὐκ ἀπεικότως καὶ ἀπιστοῦνται, ... 二箇所, 欠落が想定される。τὰ μέσαの後には、アルドゥアンにならない、とりあえずτῆς ἀγορᾶςを補い (Teubner ii p.171), τοῦ ὀργάνου οὐκ ἀπεικότωςは訳出しなかった。
- 98) *Ibid.*, 342b-c.
- 99) Dagron (1968) p.43f.; Fowden (1980) pp.54-59; Penella (2000) p.29.
- 100) Them. Or.23.295b-296a.
- 101) アシネーのテオドロス、ミュンドスのエウセビオス、エウフラシオスのように、イアンブリコス学派の中にも「新しい歌」に関心を持たない者もいた (see Penella (1990) pp.62, 65f.)。
- 102) テμισティオスがイアンブリコス流の新プラトン主義に関心を持たなかったことや、コンスタンティノーブルに定着しローマ帝国の官職に就くことが、ポリスや異教の伝統を重視するエウナピオスの価値観とは相容れなかったことが原因と推測されている (see, e.g. Penella (1990) pp.134-141)。少なくとも、「エウナピオスの興味の中心が東方に置かれており、ローマ中心に活躍する人にはさほど関心をそそられなかった」からではない (エウナピオス邦訳、戸塚七郎による解説、410頁)。テμισティオスは東方で活躍した政治家である。おそらく、ロウプ版のライトによる英語の解説 (それも1921年の!) を戸塚が正しく読んでいないことが誤りの原因である (W. C. Wright, Loeb, p.320f.)。
- 103) Julian. Ep. ad Them. 262d, 263c. テμισティオスは、ユリアヌスに対しても称賛演説を捧げたと伝えられるが、これは現存しない (Lib. Epp. 818, 1430. リバニオスはこのユリアヌス頌の写しを送るようテμισティオスに求めており、実際にテμισティオスからその写しはリバニオスのもとへ届けられたようである)。
- 104) *Ibid.*, 263d-264a.
- 105) See above n.29.
- 106) 例えば、プロティノスが言うには、政治的な徳を備えた人が決して神に似た人にならないというわけではないし、そのような人が多少なりとも神に似ていることは認める (Plotinos Enn. I

- 2.23-26)。
- 107) O'Meara (2003) p.40ff.
- 108) 新プラトン派におけるアリストテレスについては以下参照。R. T. Wallis, *Neoplatonism*, NewYork, 1972, pp.23-25.
- 109) See above n.59.
- 110) Eunap. VP 478, 481-482. (引用は、戸塚七郎訳, 308頁)
- 111) Eunap. VP 477, 480.
- 112) *Ibid.*, 461. (戸塚七郎訳, 251頁)
- 113) See n.59.
- 114) Eunap. VP 475, 480, 500-501.
- 115) See above n.110.
- 116) Eunap. *Hist.* fr.19.
- 117) Them. *Or.* 7.99d-100c. テミスティオスは名前を挙げていないが、ここで言及されているのはやはりエフェソスのマクシモスのことだろう (ただ、ヴァンダースプールは、マクシモスではなく、セクンドゥス・サルティウス (PLRE i pp.814-817 S3) である可能性を示唆してはいる (Vanderspoel (1995) p.166f., n.40))。
- 118) *Ibid.*, 100d.
- 119) もっとも、これは皇帝を前にして発表される政治弁論、称賛演説であるから、当然なのかもしれない。
- 120) Them. *Or.* 8.120a. ...ὄν ἐγὼ ποιησαίμην 'Αλέξανδρον... つまり、アリストテレスがアレクサンドロスの師であったように、テミスティオスがヴァレンティニアヌス・ガラテスの師となろう、という意味である。だが、この皇太子はこの後すぐに死んでしまった。
- 121) *Ibid.*, οὐ γελωτοποιὸς αὐτὸν προσάγεται ἔξω τοῦ μέτρου, οὐ θαυματοποιὸς ἐκπλήττει,... cf. Eunap. VP 475; マクシモスはヘカテーの神殿で、芝居じみた奇跡の業を示したことがあり (τὸν θεατρικὸν ἐκεῖνον θαυμαποιὸν), ユリアヌスはその話を聞いてマクシモスのもとへ向かったことになっている。
- 122) θεουργία, θαυματουργίαのこと。
- 123) この時点では、マクシモスはまだ存命である。
- 124) ただ、皇帝に捧げる政治弁論・称賛演説において、哲学観を主題にすることはやはり不適當であるとも考えられる。
- 125) Fowden (1982) pp.54-59.
- 126) Them. *Or.* 5.67c-68a; Soc. Schol. *HE* 3.25.
- 127) Soc. Schol. *HE* 4.32; Soz. *HE* 6.36.
- 128) 一方、ナジアンゾスのグレゴリオスは、テミスティオスのことを「弁論の王 (βασιλεὺς... τῶν λόγων)」と呼ぶ (Gr. Naz. *Ep.* 24)。
- 129) Lib. *Orr.* 1.279, 30.37, 49.2; Eunap. VP 462.
- 130) E.g. Lib. *Ep.* 34, 76.
- 131) See, Dagron (1968) p.48; Penella (1990) p.136.

《 English Summary 》

‘Philosophy’ and ‘Philosopher’ in Themistius’ Orations

Masahiro Nishimura

Since his adlection into Constantinopolitan senate by Constantius II in 355, Themistius, who was an Aristotelian commentator, Constantinopolitan senator, and politician (c.317-c.388), had delivered speeches before emperors and citizens for almost thirty years. He designated himself as a ‘philosopher’ and practiced his self-styled ‘philosophy.’ The ‘philosophy’ which Themistius advocated can be summarized as follows: (1) there are two kinds of philosophy, one concerning divine matters, the other, human matters; (2) one should follow the latter, a practical and political philosophy, which considers human and civic welfare as it once did in the age of Socrates, Plato, and Aristotle; and, (3) a philosopher has to step forward to speak in public for the sake of the audience’s own good.

Themistius’ ‘philosophy’ is incompatible with that of his contemporary Neoplatonist (especially Iamblichaeon) philosophers both in theory and in practice. Themistius criticized the unsocial and esoteric attitudes of Neoplatonists and their reluctance to speak publicly, although in fact, some Neoplatonists went to the imperial court and participated in politics. Sopater won Constantine’s favor, and Maximus of Ephesus and Priscus were invited by Julian to the emperor’s entourage. The success and fame of these men, however, was short-lived, and they soon fell victim to intrigues. Despite the fact that they did step in politics, Themistius paid little respect to this practice by Neoplatonists. Discordance among pagan intellectuals was too serious to co-operate against the Christian Church.